

日本人 調査専門ジャーナリスト 記者クラブ制度に挑む！

マダリン・アープ ジャーナリスト保護団体（CPJ）・アジア地域調査員

写真・警察との関係は常に「戦争状態」だと語る寺澤有氏。

来週控えている日本国家への第4回訴訟一。同裁判がどのような結果となるか話すとき、寺澤有氏は少し複雑な面持ちだ。

警察腐敗を専門に調査報道するフリーランス・ジャーナリストとして前線を走り続け、20年の年月が流れた。前3回の国家訴訟は取り下げられ、逆に訴え返されるという結果となった。寺澤氏は、当然の権利を主張しているだけだ。記者会見への出席、裁判の傍聴席への参加、そして、真実を報道するという当たり前の権利だ。

寺澤氏は、通訳を通して、記者クラブ制度の在り方に対して日本国家を裁判に訴えるようになった経緯を語った。

「日本記者クラブ」。それは、同会員制クラブに所属する新聞社やテレビ局だけが記者会見に参加出来るという排他的な特権を持つ日本特有のメディア制度であり、そこでは、匿名の情報入手が可能だ。

第1回訴訟で敗訴された後、即、2回目へと奮起した。そして、第3回目の挑戦で、国家の巨大権力組織と蜜月関係にある記者クラブを擁護する日本国家を訴えに出た。

法廷に出るたび、裁判長官らから、いつも同じ言い分を聞かされる。「大手メディアの報道陣が裁判を特別に傍聴出来るのは、国の義務として許可している訳でなく、あくまでそれは『お国のご厚意』という『譲歩』である」。であるからして、何故、国がわざわざフリーランスにまでも過大な親切を施さなければならないのか？そう説明を受ける。

記者クラブは日本メディアを支配している。しかし、実態は大手メディアの従業員のみに入場を規制されたものだ。

記者クラブは警察と馴れ合いの関係にある故、主流メディアは国家権力から情報入手を継続することを条件に、情報源を明かすことなく、（警察側から）言われた事をそのまま印刷する。

少しでも深く掘り下げて調査取材しようとするや否や、その記者は「嫌がらせ対象のカタログ」に登録される。

そんな中、「警察とはまるで戦争状態」と、寺澤氏はにやりと笑って見せた。

商業と繁華街が立ち並ぶ東京都・新宿の中心部にある、京王プラザホテルの3階喫茶で行われたインタビュー。

ジャーナリストという職業に立ちただかる挑戦や障害の数々を語るとき、年齢よりはるか若く見える43歳の寺澤は、非常に生き生きとした表情を見せ、時折、ジェスチャーを交えながら、机のコーヒーがこぼれるのではないかと心配するほど、熱くなる。

「警察関係を調査取材していると、警察官が殴りかかったり、尾行したり、そして盗聴したりする。ある時は、『逮捕状』もないまま、無理矢理、パトカーに押し込められ、弁護士が助けに来るまで、ずっと留置所に閉じ込められたままだった」

警察庁長官会見には改善した様子はないものの、決して歓迎ムードではないが、他の記者会見へは道が開かれつつある。「あいつが裁判訴訟を起こす奴だ」。そういう評判が流布した結果だ。

寺澤が週刊誌などに掲載した記事を、後になって、主流メディアが後追い報道することがしばしば起きていたが、近年、寺澤は、長期間の調査による発表の上梓を普及させるべく、自分自身の出版社を立ち上げた。寺澤の出版社は、有罪判決を下された少年の殺人犯に関する本を最近出版し、論争を巻き起こしている。

彼の調査報道の仕事は報われているのだろうか？

「嫌がらせを受ければ受けるほど、書くネタが増え執筆が進む」、寺澤はそうかわす。そして、読者はジャーナリストに同情するという。空港関税官の両親は、息子の争いの耐えない仕事を、快く思っている訳ではないことを、寺澤は認めている。では何故、そこまでして独立系ジャーナリストになる道を選択したのか？

きっかけは、15歳の高校生だった頃。神奈川県横浜市の私道をスクーターで走っていると、突然、スピード違反で警察官に留められた。が、それは決してスピード違反ではなかった。この警察の不正な取り締まりへの疑念が、彼の心の中で大きくなっていき、事件から7年後、大学の在学中に、ペンを取り、このような交通取締りの罰金が何に使われているかを暴露した連載記事を車の雑誌に掲載し、大反響を呼んだ。退職した警察が天下りする私営そして公営の交通建設会社。交通会社の建設工事や信号機製造などの仕事を増やす上で、予算にこうした過剰な交通取締りによる罰金を取り込まれている事実を暴露した。日ごろから、こうした過剰な交通取締り規制に不満を抱いていた読者らは、寺澤の記事に多いに共鳴したという。

警察の腐敗に対する迎合なしの長年に及ぶ質疑が実り、彼の暴露記事の結果、約100人の警察関係者が辞任、罰則、そして左遷された。

寺澤の調査報道が実りあるものとして証明されているのだから、他の人々も彼の後追いをしたらいいでないか？しかし、寺澤氏によると、それは、あまりにお金が掛かりすぎるとのこと。

「フリーランスとして生き残れたのは、純粋に才能故じゃない。いかに上手に交渉して記事代を稼ぐかを押さえていたからだ」と念を押す。

「もし、僕がお金持ちだったら、同じような調査報道を志す人たちに資金を提供したい」そう語るとき、寺澤からはニヤリとした笑いは消え、真剣な顔つきに変化したように見えた。

来週控えている今度の裁判の行方はどうなるのだろうか？寺澤は自身の経験値から、次回の裁判はかれの損失額を助けてくれるものではなさそうだと推測している。

(東京からのレポート: 翻訳、瀬川牧子)